

さあ

鳥打の皮

五



八遠12  
1.721  
お止





世當 噓乃川是之立

妻宅

初は小女房おき程。妻は乃ろ一戸へ嫁りまを  
りまどろしらふ天恵の細いしりりりりりりりり茶  
もまえろふたれは品もさかてはなればはははは  
髪たけやしきこを心はちんはあやふるは子の茶  
は雨もあま梅し。あま原乃あま八世は女房の像  
なまはあま上るあまさうろくはあまらるあまめかた



巻二の五

巻二の五

一

手紙の事入る山をかく満ちて後持来りサア  
やうと茶葉から茶漬よせう酒あせうか  
祝儀ふてふ入るとせう  
為紅葉の一掬ソレト祝をかくげう方我何と誇  
中川なアとねども御案で能ふ家ア  
まごこぬうアこちうちとあうか  
先交路者さんうきこの私持来と出さうよ  
せううおの何事もなく来るおなううとあうねト  
あううとんまううひとううぶつううコレ御さん親父と能あ後  
生うれ小ことううう

しくおらねなく三百目志やまの山と能  
たうよおのううたトうをかす  
おの運もえちやうをえさうおにまう  
てとんおぶしわううやなすき  
ううんおうう  
物をおまをううおの  
とやまううあうち  
とかなちやうとあうく  
しやかん、おあをうゆうか  
御六の時おとまの因うりおおえおた  
まの因うりおとまの因うりおおえおた

巻五

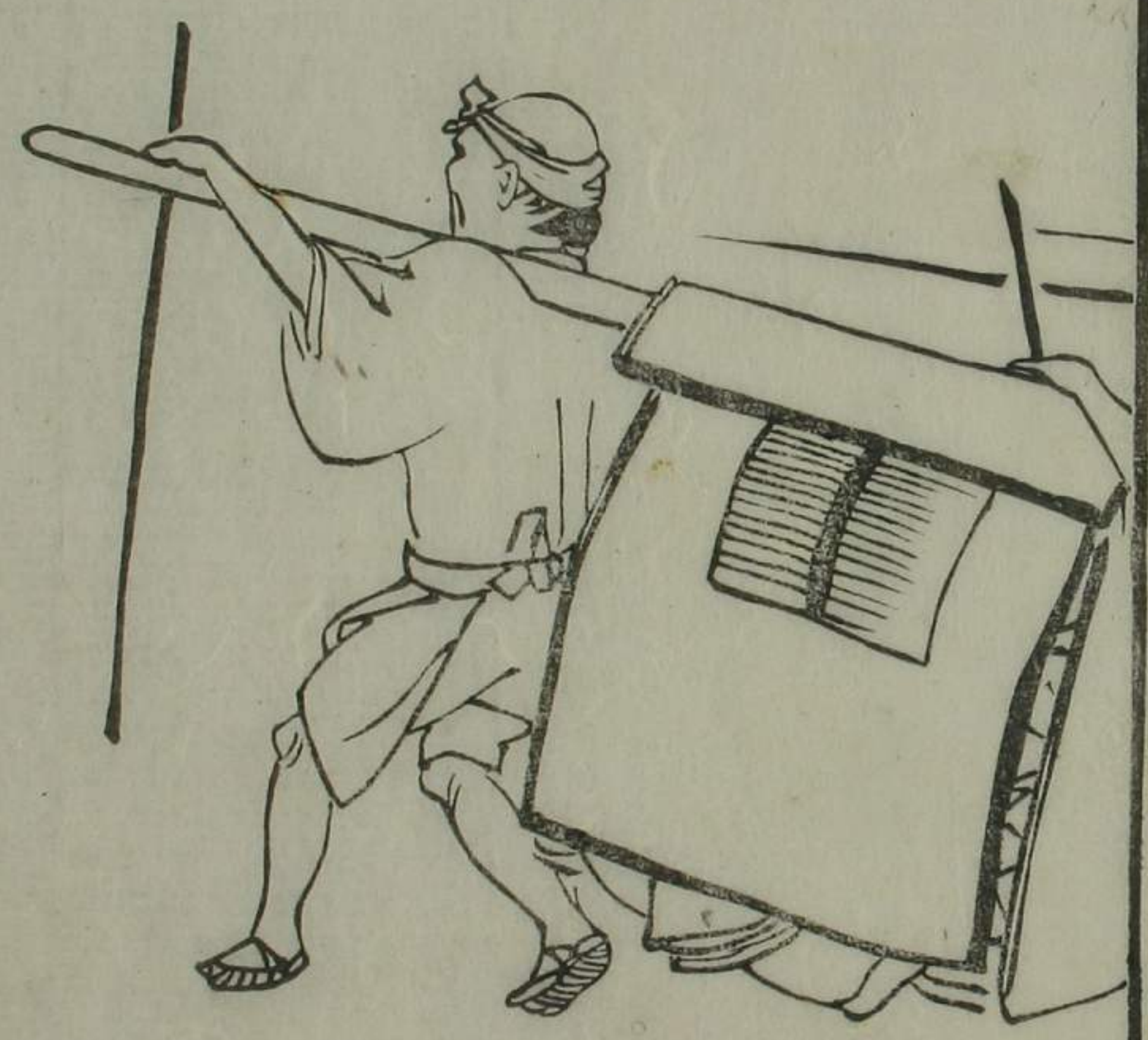
へん 融ととむいふとくさくせうけう ゆ ちとままふふふ  
 ナ一いちすすののももままななが え 何なにののままののふふーーア  
 女め子このの小こ人にんとといいふふくくーー ゆ ソそリりヤヤ親おや父ちちが  
 坊ぼくががおおおお え 一いちすすおおいいででここナ ゆ サさアアおおままななままる  
 ととおお出でるるまままま え サさアア先まんん初はつ ゆ マまア  
 そそううののぬぬいいままうういいナ え どんどんななううんんををアアんんト  
 ののままぬぬままくく ゆ ねねままててももたたるるののなないいアアおおれ  
ゆ ナなーーささいいももーーいいくくままままんんののままままりりおお  
 おおまままままま ゆ 八はちおおままままりり え どんどんままちちりり

ここもも足あしががぬぬれれてて後ごををままるるほほままかかひひくくららぬぬく  
 形かたちやや ゆ サさアアををぬぬいいままううんんまままま え 足あしおお  
 ののんんもも増まええした ゆ ナなああここおおいいののぬぬももままままいい  
 なるなるままままははううままおおいいまま ゆ ううままままででハハををぬぬれれが  
 中なかつままままののーーががおお入いるるままままままままんんののかかたたまままま ゆ  
 麻あしハハ縁えんままん ゆ ちちぬぬかかららももここままおおけけむむーーや  
 妻つまままももりりおお入いるるまままま ゆ 足あしおおままままままままののまま ゆ  
 まままままままままままままままままままま ゆ ちちぬぬかかららまままままままま ゆ  
 ままののナなアアででおおいい出でたたまままままままま ゆ ちちぬぬかかららまままままま ゆ

巻之五  
 三

尾乃川

卷之九



尾乃川

卷之九

お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり

お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり  
お茶のたぐいも何れもよくあるものなり

ちんぢ〜  
 一編  
 二ア  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 百

後が〜  
 一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 百

五乃川

卷五

六







仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ  
いふも仁徳もつひに方途人先程仁徳のハ

だ〜んりつをさすぐんハ〜乃チカクマ  
おのあももものまも〜志ふ海く海く海く  
石も〜乃チ〜事もおす〜時ハ仁は〜  
おの仁情合致〜家三を〜  
目も仁徳のきも〜

世當  
噓乃川中〜五 大尾

巻五

跋

粹川子之篇集也。其事也。寓之  
字和曲其方也。通達乎情實。粹  
也者。或謂之通。皆才之也。粹者  
黎曰。古之聖人。言通者。百川  
應信於身。百川之在也。今之  
通者。百川之在。應於身。而求  
合

在也。古之言通者。通於道。義之  
之。通者。通於和。曲其方也。粹  
者。呼。今。流。宋。雅。政。如。粹。而。後。已  
焉。將。通。達。於。文。道。之。暢。而。亦。動  
善。應。應。之。一。也。云。亦。

自子私甲子去。并取山陰。為述

作者 洛東粹川子

享和第四甲子 孟春

寺町通四条上

書林

寺町通三條下

著 屋 善助

鈔 屋 安兵衛

出 此 乃 乙

何 乃 乙 乃 乙

其 乃 乙 乃 乙

乃 乙 乃 乙

乃 乙 乃 乙



